

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】鈴木真奈

【所属】(助成決定時) 文学研究科

【研究題目】1980年代の日本の家庭におけるコンピュータの受容について

【研究の目的】(400字程度)

1980年代の一般家庭とコンピュータの関係を考える上で、家庭を対象としたパーソナルコンピュータの調査を中心として、当時提唱されていた「家庭の電子化(ホームオートメーション)」「ホームエレクトロニクス」がいかなる影響を及ぼしていたかを明らかにする。

「ホームエレクトロニクス」は、家電製品を指し示すものとして残存しているが、その当時においては、大規模な通信インフラによって家電製品・通信機器・AV機器などをコンピュータで統合的に制御することで家庭・職場を繋ぐ構想として、電気学会・科学技術庁などが着目していた。このような構想が産業的に成果を残したとは言いがたいが、家庭を対象としたコンピュータの用途が模索されている中で、シーズ型の提案としてホームエレクトロニクスの開発は推し進められていた。すなわち、1980年代当時のホームエレクトロニクスを研究することは、コンピュータが商品化される前段階において一般家庭とどのように結びつくものと考えられていたかを研究することに等しい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1980年代のパーソナルコンピュータの開発および広報がどのようになされていたか、主として図書資料と博物館資料を中心に調査した。また、当時の日本電気においてPC-8001等の開発に携わった日本電気ソリューションイノベーター株式会社の社員にインタビュー調査を行った。

図書資料は雑誌を中心に、これまでの研究調査を補う形で、国立国会図書館・京都府立図書館において『マイコン』『日経パソコン』『マイ・コンピュータ』などを閲覧、必要箇所を複写した。また、国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている『NEC技報』などについては、交通の利便の点から京都府立総合資料館の端末で閲覧・印字を申請した。また、現物の確認として、榎尾俊雄発明記念館と東京理科大学近代科学資料館へ行き、本研究に関連する展示物については許可の上で撮影を行った。

以上の調査結果の一部を、科学史学会(発表表題「1980年代の日本における家庭とコンピュータの関係」と日本産業技術史学会(発表表題「1980年代の日本における家庭とコンピュータの関係」)で口頭発表した。

【結論・考察】(400字程度)

日本電気でパーソナルコンピュータの開発に携わった社員のインタビュー調査からは、ホームエレクトロニクスは必ずしも当時のコンピュータ開発の現場において広く認知されたものとは言いがたい。本調査で閲覧・複写した『NEC技報』や、岩元莞二・高橋政雄『ホームエレクトロニクス』(朝倉書店、1990)と合わせて評価するに、日本電気ではなく、新日本電気(日本電気ホームエレクトロニクス)において注目されていた概念だと思われるが、新日本電気の当時を知る者に調査期間内では到達することができなかった。ホームエレクトロニクスという語は登場しなくとも、家庭内の電化製品や情報通信を統括するコンピュータが「近い未来の日本」の姿として描かれることは、『マイコン』などの雑誌報道に見られた。反面、『日経パソコン』の1984年の報道では、技術開発が先行するばかりで、実際の需要を切り開くには至っていないという評価が当時より存在した。このホームエレクトロニクスが1990年以降現在に至るまでどのように変化していったのかについては、調査期間内に結論を出すことはできなかった。